

# 中高6ヶ年を見通した現代国語の教材編成

— 説明的文章，論説文，評論 — その1

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

石井 正己・石川 祐爾・石田城之介・監谷 健  
鈴木 信好・須藤 敬・関口 隆一・松井 一夫

# 中高6ヶ年を見通した現代国語の教材編成

— 説明的文章，論説文，評論 — その1

石井 正己・石川 祐爾・石田城之助・鹽谷 健  
鈴木 信好・須藤 敬・関口 隆一・松井 一夫

## 〈始めるに当たって〉

これまでに中高6ヶ年一貫教育の下，古典教材，小説教材の読解指導を一定の観点から捉えて，6学年毎の教材配分を検討し実践してきた。

小説教材に関しては，中1の『トロッコ』から高3の『こころ』まで，学年毎に最低一学年一教材を特定し，中1の「人物・構成」から高3の「人物・構成・描写」まで，学年毎に重点的に読解の観点を配分し，6ヶ年間で系統的，総合的に指導しようとして，実践検討してきた。

今年度から，説明的文章，論説文，評論の分野に，同じ手法で取り組んで，6学年毎に特定の教材を配分しようとして始めるものである。

しかし，説明的文章，論説文，評論は，その採り上げてある題材が多岐に渡って（科学的，文学的，哲学的，思想的，歴史的等）あるので，読解の観点を学年毎に順序よく設定するのも難しそうである。従って，必ずしも所期の結果が得られるとは限らないが，古典教材研究，小説教材研究の後を受けるものとして，取り組んでみようとするものである。

小説教材に比べて，学年毎に教材・観定の特定配分をするのは難しそうなので，教科書ではどのように採り上げてあるのかを調べる必要があるだろう。また，生徒の印象でも，小説教材に比べて記憶に残っている作品が希薄なので，生徒の意識調査も必要になるかも知れない。従って，容易に実践検討には移せないかも知れないが，いろいろと調査し，その分類検討から始めて，この課題の実践の可否を含めて取り組み始めてゆこうと考えている。

初年度の取り組みとしては，中学校高等学校の検定教科書所収の説明的文章，論説文，評論を全て抜き出して，どのような作品をどのような教材として扱ってあるかなどを検討し，次年度以降の方向を探ってゆきたい。

## 〈表の見方・説明〉

- ① 教科書所収教材であっても，随筆性が高いなど，我々の判断として外した教材もある。
- ② 分量の関係から，「内容」はできるだけ簡潔にまとめて掲載した。

## 〈教科書を読んで〉

### ・中学校

中学校5社の教科書を読んで、そこに収められている説明的文章の内容(題材)を6つに分けてみた。

- ① 科学的読み物(23%)  
「フンダカバチの秘密」・「渡り鳥のなぞ」など
- ② 文化論・民俗論(24%)  
「日本の犬と西洋の犬」・「切ることと創ること」など
- ③ 特殊な分野・世界の紹介(15%)  
「生きている民話」・「幻の錦」など
- ④ 言語・コミュニケーション論(23%)  
「日本語の特色」・「ものの見方と言葉」など
- ⑤ 公害対策(12%)  
「地球の砂漠化」・「根源的なごみ対策」など
- ⑥ 青春論(2%)  
「正義派が傷つくとき」・「自分をつくる」など

このうちの④言語・コミュニケーション論の内容が、直接国語科の授業で取り扱う分野を含んでいる(たとえば「日本語の特色」の敬語表現のように)外は、多く、理科的・社会的な内容である。

また、中学1年性に、「科学的読み物」が多く、学年が進むにつれて抽象性の高い「特殊な分野・世界の紹介」「青春論」などが出てくるのは、生徒の発達段階から考えて妥当であると思われる。

今回は一応、教科書の全体を見通すという目標のもとにある程度分類ができた。次年度はこれらをふまえて、説明的文章の精選の観点を探っていきたい。

### ・高等学校

高等学校では13社、国語Ⅰ-22冊、国語Ⅱ-19冊、現代文-18冊の計59冊の教科書から説明・評論・論説をリストアップした。

中学校のように、試みに内容による分類を行ったところ、あまりにも種類が多く、とても6つのワクには収まりきれないことがわかった。

したがって、高等学校の方は全教科書に目は通したものの、教材編成のための手がかりを見つけ出すまでには至らなかった。

ただ、生徒は、中学から高校へ進学することによって、学ぶ環境は変化するものの、読解力が飛躍的に伸びるはずはないのに、中学3年と国語Ⅰの文章とを比較すると、後者が急に難しくな

っているという印象を受けた。

本校では同一教師が中3・高1と連続で担当することがあるが、上記の印象は教師・生徒の両面から言われていることも付記しておきたい。

	著 者	出 典	題 名	内 容
国 語 I	岩波 洋造	書きおろし	植物のにおい	植物の発するにおいの動き
	アンリ ・ファーブル	「昆虫記」の書きおろし	フジダカバチの秘密	題名の通り
	古川 晴男 訳 桑原 茂夫	だまし絵	ちょっと立ち止まって	視点を変えて見ることの必要性
	樺島 忠夫	書きおろし	無言化社会の中で	コミュニケーションの大切さ
国 語 II	大岡 信	ことばの力	言葉の力	言語論を身近な例・新しい例で
	伊藤 和明 赤木 昭夫	書きおろし ひろがるさばく	湖は今— ひろがる砂漠	湖の現状 さばくの現状
	アルフォンス ・デーケン	書きおろし	ユーモア感覚のすすめ	外国人がみた日本の子供
	宮地 裕 小原 二郎	書きおろし 法隆寺を支えた木	日本語と国際交流 法隆寺を支えた木	言語論 〔読書〕として紹介
現 代 文	河合 雅雄	「動物の行動」 に加筆	動物の文化的行動	主としてサル・チンパンジーの生態
	福井 謙一	「学問の創造」 を加筆	広く学ぶ心	科学と芸術の接点
	三好 行雄	書きおろし	新しい文体の誕生	文学史
	斎賀 秀夫	書きおろし	日本語の特色	題名の通り
	本多 勝一 井上 靖	書きおろし	民族と文化 人間の叡知を	民族論 (講演)核反対論

	著者	出典	題名	内容
国語 I	柴田 武 富山 和子	書きおろし 「川は生きている」 加筆	言葉を学ぶ 森林のはたらき	言葉を学ぶことの意味 題名の通り
	柴田 敏隆 藤原 英司	書きおろし 「虐殺される動物たち」加筆	渡り鳥のなぞ オオカミは害獣か	題名の通り 題名の通り
	千葉 康則	「やぶにらみ脳生理学」加筆	イルカは知能が高いか	題名の通り
	瀧本 敦	雑談「自然」	春を待つ草木	植物の生態
国語 II	池上 嘉彦	「新しい世界を創ることば」に加筆	新しい世界をつくる言葉	題名の通り
	福沢 周亮 森本 哲郎	書きおろし 「日本の挽歌」に加筆	言葉のイメージ 香り	題名の通り 俳句の解説風
	森本 孝	「渚のくらし」に加筆	なぎさの暮らし	異文化紹介
	妹尾 河童	河童が覗いたヨーロッパ	ヨーロッパの窓	ヨーロッパの窓の特徴
	源 弘道 山岸 崇	朝日新聞	通潤眼鏡橋 よみがえった「ろう管」	橋のできるまで、考え方 アイヌの歴史、外国との かかわり
現代文	中本 正智	書きおろし	列島の春	日本の季節観
	井上 尚美	書きおろし	ものの見方と言葉	題名の通り
	高 史明	生きることの意味	生きることの意味	題名の通り
	吉田 武彦	書きおろし	飢えの世界	世界の飢えの現状
	常本 暁子	書きおろし	かめない子供が増えて いる	題名の通り
	福井 謙一 只野 哲	学問の創造 書きおろし	科学と人間 幻の錦	題名の通り 錦の歴史（シルクロード 他）

出版社（三省堂）

	著 者	出 典	題 名	内 容
国 語 I	竹内 敏晴 石城 謙吉 上田 篤 原 ひろ子 松永 伍一	書きおろし 書きおろし 橋と日本人 子どもの文化人類学 わらべ歌	春がきた，春がきた イワナのなぞを追う 潜り橋 切ることと創ること 童歌の心と生命力	表現論 題名の通り 橋の歴史・考え方 インディアンの文化 題名の通り
国 語 II	崎川 範行 藤原 英司 堀 淳一 森本 哲郎 加藤 秀俊	科学のこぼれ話 動物の行動から何を 学ぶか 地図―「遊び」から の発想 すばらしき旅 生活のリズムの文化 史	空を飛ぶ話 自然と農薬 北が上でない地図 砂漠への旅 日本人の食生活	「飛ぶ」ことの科学 題名の通り 視点を変えて見ると…… 砂漠とは？ 題名の通り
現 代 文	石田 春夫 金田一春彦 吉村 功 臼井 吉見	セルフ・クライシス 日本語の特質 ごみと都市文化 自分をつくる	分ける・押さえる 日本人の表現 根源的なごみ対策 自分をつくる	右利き・左利き・脳の働 き 表現論 題名の通り (講演)自分・他人・ 成長

	著者	出典	題名	内容
国語 I	諏訪 彰	書きおろし	噴火の秘密を探る	火山の噴火のしくみ
	富山 和子	川は生きている	暴れ川を治める	治水の歴史
	小西 正泰	新動物誌	カブトムシ	カブトムシの生態
	池田 弥三郎	日本のことわざ	町角の標語	標語の種類・性質
	池田 摩耶子	日本語再発見	あいづち	「あいづち」の意味
国語 II	原 ひろ子	書きおろし	切ることと創ること	インディアンの文明
	白井 健策	巻頭随筆	時計はなぜ右回りか	題名の通り
	戸川 幸夫	雑誌「展望」	イリオモテヤマネコ追跡	題名の通り
	外山 滋比古	書きおろし	急がば回れ	ことわざの話
	藤原 正彦	書きおろし	奈良時代の九九に思う	題名の通り
	大石 初太郎	書きおろし	日本語の特色	題名の通り
現代文	水谷 修	日本語の生態	「こんにちは」の用法	題名の通り
	渡辺 実	雑誌「言語生活」	桜の花びら・からまつの葉	季節感の説明
	森本 哲郎	ことばへの旅	静かさについて	古典引用の、日本人の感覚について
	岩田 慶治	朝日新聞より	生き物と人間と自然	タイの原住民とくらして思ったこと
	武田 清子	わたしたちと世界	新しい時代の課題	諸外国とともに進む日本人
	上田 篤	橋と日本人	潜り橋	橋の説明
	広中 平祐	生きること学ぶこと	学ぶことと人間の知恵	題名の通り
	鈴木 孝夫	書きおろし	日本の犬と西洋の犬	比較文明論
	稲垣 吉彦	美しい日本語	日本人の好きな言葉	題名の通り
樺島 忠夫				

出版社（学図）

	著者	出典	題名	内容
国語 I	井尻 正二 加藤 一郎 松谷 みよ子	マンモスをたずねて 象形文字入門 民話の世界	マンモスの狩人 インディアンの手紙 生きている民話	マンモスと人々の生活 インディアンの記号論 民話の紹介と現在
国語 II	斎藤 美津子 久田 光彦 コンラート・ローレンツ 日高 敏隆 訳 上田 篤	ことばのキャッチボール 生きものの世界 ソロモンの指環 橋と日本人	心の温かさの交換 赤とんぼはどこに アクアリウム 橋と日本人	コミュニケーションの大切さ 赤とんぼの生態 生物の不思議 日本人の“橋観”
現代文	熊井 久雄 宮脇 昭 右遠 俊郎	土のはなし I 緑の証言 青春論ノート	地球の砂漠化 自然のシステムに学ぶ 正義派が傷つくとき	題名の通り 土・緑の豊かな地球を作ろう 青春論

	著者	出典	題名	内容
国語 I	寿岳 章子	思いは深く	言葉の美しさ	言語論。責任をもつ，独創性，思いやり，多角的。
	今西 錦司	自然と山と	自然の挽歌	自然破壊。
	中村 光夫	中村光夫全集	日本の近代	講演。
国語 II	成瀬 武史	ことばの磁界	黄色い太陽	西洋人と日本人の心の碎組みの違い。（慣用）
	谷川 徹三	人間であること	自分の世界	自分の世界をもつ大切さ。
	小林 秀雄	美を求めて	美を求めめる心	眼をはたらさせる。言葉の姿，形。
現代文	高橋 たか子	記憶の冥さ	人と人の呼びあう声	自分の中の不仕合わせを埋める。
	井上 ひさし	「朝日新聞」	今どこにいるのか一日本語	文字による遺伝外情報，映像と文字。
	柴田 翔	生きがいを求めて	青春という「生の季節」	青春論。文学論。
	市川 浩	<身>の構造—身体論を超えて	手を見つめる	他と自己の発見。他有化（疎外）。
	寺田 寅彦	雑誌の「改造」	案内者	案内者（記）の功罪。
	谷崎 潤一郎	雑誌の「経済往来」	陰翳礼讃	漆器の美，闇と美の関わり。
	夏目 漱石	朝日講演集	現代日本の開化	

	著者	出典	題名	内容
国語 I	小川 国夫	舷にて	出発の不安	人生の出発を仕事と考える（人生論）。
	外山 滋比古	ことわざの論理	転石苔を生せず	社会と言葉（言語論）。 相対性。イギリス型からアメリカ型へ。
	辻 邦生	霧の廃墟から	近い旅遠い旅	日常の感覚を超えることの大切さ（旅行論）。
	中村 光夫	中村光夫全集	友情について	友情の意味、愛情との違い。（友情論）
	寺田 寅彦	続冬彦集	「手首」の問題	バイオリン、ゴルフなど。 「心の手首」が柔軟であること。
国語 II	森本 哲郎	豊かな社会のパラドックス	情報化社会を生きる	知識が情報になる。渋滞と照応させながら述べる。
	清岡 卓行	手の変幻	ミロのヴィナス	欠落した両腕。
	木村 尚三郎	歴史の発見	「歴史」とは何か	過去を再構成する。過去は究極的には不可知。
	伊藤 勝彦	虚構の時代と人間の位置	ホモ・メティエンス	虚言人。（言語論）
	中村 雄二郎	知の旅への誘い	好奇心	知的情熱の大切さ。「おもしろい」とは。
現代文	高橋 和己	「山陽新聞」	自立と挫折の青春像—わが青春論	（青年論）
	和辻 哲郎	雑誌「思想」	面とペルソナ	顔面。面。デフォルメ。 能面。人格。
	小林 秀雄	雑誌「文学界」	平家物語	叙事詩人の伝統的な魂。
	丸山 真男	日本の思想	「である」ことと「する」こと	
	加藤 周一	「朝日ジャーナル」	創造力のゆくえ	近代は新しい「形」を生み出さない。二重生活。

川田 順造	無文字社会の歴史	文字と社会	秘儀性と規約性。 (文字論) 足に対する蔑視。ふつう 意識されないだけ強烈。 (身体論)
山口 昌男	笑いと逸脱	足の表現力	

出版社（学校図書）

	著 者	出 典	題 名	内 容
国 語 I	真下 信一 稲垣 佳世子 中村 明 森本 哲郎 水上 勉 辻 邦生	人生をどう生きるか 知的好奇心 日本語のレトリック 雑誌「青春と読書」 生きるということ 海辺の墓地から	自己をつくる 情報への飢え 日本人の表現 埋もれた古代都市 橋を架ける 基督降誕祭以後	青年論（高校生）。 常に情報を求めている。 他律の行動原理，非限定性・間接性・省略性。 生きているとは埃をよせつけないこと。 「精神」
国 語 II	福永 武彦 加藤 秀俊 なだ いなだ 大岡 信 土居 健郎 中村 雄二郎 今西 錦司	遠くのこだま 人間開発 人間，この非人間的なもの ことばの力 「甘え」の構造 考える愉しみ 私の自然観	始める前 個人の可能性 東名高速を歩いた牛 言葉の力 罪と恥 水—存在のエレメント 私の自然観	緊張感の楽しさ。 黒沢明「生きる」，幸福と可能性。 人間の想像力の弱さ。 あたりまえの言葉しかない。言葉を支える人間。 ベネディクト批判。 エレメントとしての水。 自然と人工，自然と人間，人間化された自然。
現 代 文	森 有正 東山 魅夷 夏目 漱石 田中 靖政	いかに生きるか 日本の美を求めて 私の個人主義 知識社会の構想	いかに生きるか 心の鏡 私の個人主義 「知・情・意」の調和をめざして	内面的促しが人格の基礎，人間の尊厳。 風景（自然）は人間の心の祈り，随筆風。 自己本位，自由と義務，個人主義の寂しさ。 「科学的文化」に属する人々に必要な情（感性），意志力と行動力。

	中野 孝次	からだで覚えるわざ	体で覚えるわざ	職人芸が尊重されない社会のおかしさ。 危険の感覚を持ち続けていたい。  人間も食肉獣の一匹にすぎない、写真（収集家）コラム。 都市論、寝殿作りと巨大なビルはともに日本的。 全宇宙・全生物の価値観から人間を見る。 「である」論理から「する」論へ = 日本の近代化 →未熟さ
	大江 健三郎	出発点	危険の感覚	
現	小倉 朗	日本の耳	日本の耳	
	山崎 正和	芸術現代論	記録と狩猟	
代	小林 秀雄	ゴッホの手紙	焼き物二題	
	中村 真一郎	暗泉夜話	伝統	
文	三木 卓	夏のよろこび	イルカと歴史	
	丸山 真男	日本の思想	「である」ことと「する」こと	

出版社（三省堂①）

	著者	出典	題名	内容
国語 I	茨木 のり子 深代 惇郎 西江 雅之  喜志 哲雄	詩のころを讀む 深代惇郎の天声人語 雑誌「言語」  日米のコミュニケーション	生まれて やっかいな動物 文化と言語  せりふの文体	詩論（吉野弘），随筆。 コラム 言語の背景にある文化差（アフリカ，アメリカ，日本）。 外国語の戯曲の翻訳（ニュートラルな原文を生かす）。
国語 II	森崎 和江 川本 茂雄  渡辺 一夫  花田 清輝 なだ いなだ	光と海のなかを ことばとことば  渡辺一夫著作集  花田清輝著作集 人間，この非人間的なもの	光と海の中を サンドイッチあります か一場面とことば 偽善のすすめ  ものぐさ太郎 人間性と想像力	思春期は2度目の誕生。 敬語論。（ぞんざい体とていねい体） りっぱな人間のふりをし通せ。  想像力と抽象化。残酷さ。
現代文	伊藤 整 内田 義彦  石田 英一郎 石川 啄木  加藤 周一  夏目 漱石	知恵の木の実 きくとよむ  雑誌「美術手帖」 「東京毎日新聞」  現在都市政策 I — 都市政策の基礎 朝日講演集	青春について 聞と聴  人間の呼ぶ声 食ふべき詩  都市の個性  現代日本の開化	聞こえてくるように聴くことが大切。 普通の人間性。 詩に対する軽蔑，必要な詩（詩の存在理由）。 東京は変わる町，私的空間の差，都市論。

	著者	出典	題名	内容
国語 I	黒井 千次	草の中の金の皿	どうすれば虹の根元に行けるか	子供の問いと答え。子供の問いかけを大切にする。
	島津 祐子	小説のなかの風景	忘れられない場面	自分の子供時代を見つめなおす。
	水谷 修	日本語の生態	「こんにちは」の用法	他人の関係で使う語。
	富岡 多恵子	女子供の反乱	ことばのお里とは何か	地域語と共通語。
	安野 光雅	空想工房	遠近法の錯覚	“遠近法”の発見。
	堀内 四郎	雑誌「本」	左右学の必要性	研究材料を自分の目で確認。貝。人間の利きの探究。
	高取 正男 如月 小春 鈴木 志郎康	日本的思考の原型 雑誌「へるめす」 メディアと〈私〉の弁証	個人のシンボル 都市民俗は歌うか メディアのなかの「私」	西欧と日本。 生活リズムのはやさ。 若者の「出たがり」意識。
国語 II	鮎川 信夫	現代の詩人 2 鮎川信夫	青春の遍在	青春論
	竹西 寛子 山崎 正和	ものに逢える日 混沌からの表現	ことばと私 日本人の心とかたち	「子曰はく」という表現。文明批評論（文明批評の意義）。
	鶴見 俊輔	太夫才蔵伝	漫才との出会い	紋切り型の芸術でありながら即興性の芸術でもある。批評の方法。「罪」。
	岸田 秀	出がしら、ものぐさ 精神分析	自我構造の危機	児童期から成人期にかけて自我構造を組みかえる。日本に青年期がみられるようになったのは近代から。
	C・レウィース トローズ 松本 カヨ子訳	構造・神話・労働	労働の表象	「労働」という言葉の表わすものが違う。

現代文	川崎 洋	方言再考	アイヌ語を訪れて	書簡体，聞書，方言論（体験記風）。記録ではなくて生きものをして残す。
	富岡 多恵子	藤の衣に麻の衾— 「女のことば」と 「国のことば」—よ りの抜粋	「女のことば」と「国 のことば」	学校は「国のことば」（母国語）を教育＝「中央のことば」。「母のことば」＝「地方のことば」＝喋ることば。女が社会的にものを言うときにエスペラントを使用すべき。記号論。文字と写真を比較。（写真は抽象化されていない）
	名取 洋之助	写真の読みかた	記号としての写真	大和絵（複数視点）と透視図法。座談会とシンポジウム，立ち聞きする伝達。
	外山 滋比古	日本の修辞学	立ち聞きの座	予言性のある表程様式，創造力のある大衆文化。日本の社会の矛盾をまっすぐに見せているという方法。
	鶴見 俊輔	家の中の広場	漫画という言葉	意識の働き。精神と物体の二元論共同主観。
	中村 雄二郎	哲学の現在	意識と主体の自覚	

出版社（三省堂③）

	著 者	出 典	題 名	内 容
国 語  I	遠藤 周作	読書と私	読書の楽しみ	他人の人生を生きる。違った眼鏡をかける。
	増田 れい子	独りの珈琲	ほんとうの顔	一人の時の顔と心を通い合った人という時の顔。
	加藤 秀俊	メディアの周辺	テレビは魔術師	テレビは現実から離れている（加工）。ハレの文化。メディア論
	塩野 七生	イタリアからの手紙	ナポレターノ	ナポリッ子。雑草のようにたくましい。
	平岩 弓枝 山下 正男 柴田 武	お宮のゆみちゃん 論理的に考えること これからの日本語	日本のふるさと 春風と桶屋 ことばと人づきあい	国宝修理。 論理的に考えること。 講演。内容のないことばで話しかける。（言語論）

出版社（教育出版）

	著者	出典	題名	内容
国語 I	井上 靖 / 北杜夫	「波」（1979.6）	本との出会い（対談）	読書論
	外山 滋比古	「省略の美学」	きょうめい	芸術と鑑賞者との「共鳴」
	小林 秀雄	新訂小林秀雄全集第七巻「文章について」		文章の書き方（要約付き）
	中野 重治	中野重治全集第二十二巻	私の書き方	“（”）
	河盛 好蔵	「辞典のはなし」	辞書を引く楽しみ	「猫」を例に辞書（日、仏を主）について
	板坂 元	「日本人の論理構造 一部に筆者加筆」	日本人の論理構造～自発の助動詞「れる、られる」	自発的発想の日本人
	清岡 卓行	「手の変幻」	「失われた両腕」	美はイメージを想像することで生まれる
	岩崎 武雄	「正しく考えるために」	批判的精神	自信と謙虚さは批判的精神から生まれる
国語 II	川田 順造	「曠野から」	アフリカで考える	単純な自然讃美の批判と、理想の自然
	中村 雄二郎	「哲学の現在」	生きること考えること	題に同じ
	岡本 太郎	「わが思索わが風土」	純粋な生命の戦慄	日本の精神の風土
	西谷 啓治	「風のこころ」	飯を食った経験	純粋な経験について
	谷崎 潤一郎	現行日本文学全集71 谷崎潤一郎集（二）（「陰翳礼讃」）	陰翳礼讃	日本の食卓・食器の陰影
	山崎 正和	「文化の発見 人間の世紀第3巻」	人間と環境のドラマ	人間と環境・歴史と自然の関係
	中村 真一郎	「文章読本」	書くということ	文章の書き方
	扇谷 正造	「聞き上手・話上手」	聞き上手	聞くことの重要性
山本 正秀	「言文一致の歴史論考」	口語文体の確立	口語文確立の歴史	

現 代 文	丸山 真男	「日本の思想」をもとに再構成	「である」ことと「する」こと	日本の近代社会の特質
	中岡 哲郎	「もののみえてくる過程」	機械と人間	機械を通じた自己認識
	武満 徹	「音楽の余白から」	私の紙ピアノ（インタビュー）	西洋と日本の音楽
	岩崎 昶	「映画の理論」	映画芸術の成立	芸術としての映画
	夏目 漱石	「漱石全集第二十一卷」抄出，再構成	私の個人主義	個性の伸長と個人主義
	高橋 和巳	高橋和巳全集第十三卷	夏目漱石と近代	漱石を通して見た日本近代
	カミュ / 清水徹 訳	カミュ全集 2 異邦人・シーシュポスの神話	シーシュポスの神話	不条理と，それに対する知性の反抗の哲学
	北村 透谷	北村透谷選集	厭世詩家と女性	恋愛の持つ意味
	島崎 藤村	「藤村詩抄」自序	藤村詩集序	自分にとっての詩の意味
	埴谷 雄高	埴谷雄高作品集13	思想の幅	人間にとっての思想

出版社（光村図書）

	著者	出典	題名	内容
国語 I	梅棹 忠夫	文明の生態，史観	東と西の間	インド旅行を元にインドの現状分析を日本との比較から展開している。
	大塚 久雄	社会科学の方法	ロビンソン・クルーソーの経済	「ロビンソン・クルーソー」に描かれた，創作時の英社会・経済の反映を分析的にする。
国語 II	今西 錦司	私の自然観	同左	人間の文化・文明と自然の関係を総体として見る。自然からの人間の独立と対峙→人工的自然，自然の人間化。
	日高 敏隆	人間についての寓話	人類は滅びるか	人間を生物（動物）として分析し，その意識との関係を展開する。
	鈴木 孝夫	ことばと文化	ものと言葉	言語の機能，文化と民族による認識の差が言語となって現れている。
	外山 滋比古	省略の文学	理解と誤解のあいだ	人間と機械の相似性と異質性 人間の理解を内的変化の問題とし—誤解（繰り返しの理解と異なる）と言う語で積極的に評価。
	加藤 周一	都市の個性	同左	現在における都市の変化の問題を世界的に見る。（近代化との関わり）そして東京（日本）の問題解決をさぐる。
	木村 尚三郎	歴史の発見	歴史への問いかけ	過去をどのように認識するか。現代における歴史

				家との関わりを明らかに現代へとつながる問題を明らかにする。
現	井上 靖	わが一期一会	点は墜石のごとく	ことば（ものの見方）との出会いによる自己の意識化。 既視感などをもとに、人間の原初的な意識を登山（道）との関係で考察する。空開的なアイデンティティ。 日本の近代の二重性（新・外・公→旧・内・私）。思想面と感情面を指摘し、歴史的概念・進歩の持つ日本での意味を考察する（伝統の持つ意味と日本での様態）
	古井 由吉	山に行く	同左	
	加藤 周一	創造力のゆくえ	同左	
代	清水 博	生命を捉えなおす 生きている状態とは何か	生命の文化	近代化学の問題を、相互性を基本（非線型）として考えることで人間社会の解明に結びつけている。 常識でない「共通感覚」との定義により、社会的、総合的な認識（光村現代文）を考える。  芸術という語から出発し、その日本的な特徴をヨーロッパとの比較から見、更に具体的に伝統の中での考察から、普遍性を言う（自然の解釈に少々問題あるか）。
文	中村 雄二郎	考える愉しみ	コモンセンスとはなにか	
	小林 秀雄 唐木 順三 小倉 朗	無常ということ 光陰 日本の耳, IV 芸と術	西行 存在と言葉 芸と術	

現代文	山崎 正和	劇的な日本人	現代の芸術	現代を情報化社会とし、 情報化とは、現実喪失と 考える。そこで近代人 (芸術家)の自己の証明 の難しさを言う。 佐久間象山を考察しつつ、 思想、思考方法の分析を し、日本の近代化の出発 点を考える。
	丸山 真男	幕末における視座の 変革	同左	

	著者	出典	題名	内容
国語 I	高橋 道子	「ベリネイタル・ケア」（1985）に加筆	ほほえみの話	乳児の微笑の観察
	小林 秀雄	新訂小林秀雄全集第四卷（「読書について」）	読書について	読書論
	土居 健郎	「甘え」の構造	「甘え」の着想	日本と西洋の違いを「甘え」を例として
	稲垣 栄三	朝日新聞（1981）	座敷の喪失	座敷に見る近代の住居の意味
	金田一 春彦	「日本人の言語表現	日本語の表現	日本語の表現の特徴
	鈴木 孝夫	「ことばと文化」	ものとことば	認識における言語の役割
坪井 忠二	私の文章修業	親切な表現	わかりやすい文の書き方	
芳賀 綏	「言語」1978・5	文章について	〃	
国語 II	小泉 文夫	「音楽の根源にあるもの」	わらべ歌	わらべ歌の伝播について
	大森 莊蔵	「流れとよどみ」	「論理的」ということ	「論理」の性質について
	石田 英一郎	「東西抄—日本・西洋・人間」	人間の呼ぶ声	原始と文明との違い
	阪倉 篤義	書き下ろし	日本語のこころ	「いとほし」などに見る日本人の心性
	福原 麟太郎	「この世に生きることに」	文章について	近代口語文の成立過程
中村 明	書き下ろし	表現を選ぶ	いろいろなレベルでの的確な表現の選択	
佐藤 信夫	「レトリック感覚」	レトリック感覚	直喩について	
現代文	山崎 正和	「劇的なる日本人」	今日と明日の芸術	情報化時代の芸術のあり方
	谷崎 潤一郎	谷崎潤一郎全集第二十卷（「陰翳礼讃」）	陰翳礼讃	日本の食事・食器／建築の陰翳

現 代 文	尾高 朝雄	「数の政治と理の政治」	多数決の原理	多数決の原理の持つ意味
	中村 光夫	「日本の現代小説」	日本の現代小説	大正～昭和期の小説について
	夏目 漱石	「漱石全集第二十一巻」(現代日本の開化)	現代日本の開化	文明開化のあり方について

	著者	出典	題名	内容
国 語 I	大島 渚	「青春について」	不可能性の発見	青春論
	森本 哲郎	「読書の旅」	赤いエンピツ	読書論
	池上 嘉彦	「ことばの詩学」を もとに書き下ろし	言葉についての新しい 認識	言語論
	金田一 春彦	「日本語の特質」	漢字の性格	漢字について
	山崎 正和	「混沌からの表現」	水の東西	水に見る東西文化
	遠藤 周作	「よく学び、よく遊 び」	日本人と笑い	笑いに見る東西文化
	湯川 秀樹	「自己発見」	科学文明の中の人間	科学論
	村松 貞次郎	「図書」1985.7	やわらかいものへの視 点	近代工業に見る均質化に ついて
福田 清人	「文章表現」	何に焦点をあてて書く か	文学作品に見る良い文章	

	著 者	出 典	題 名	内 容
国 語 I	佐藤 信夫 林屋 辰三郎・ 梅棹忠夫・多田 道太郎・ 加藤秀俊 小林 秀雄	「レトリックを少々」 「日本人の知恵」  新訂小林秀雄全集第 九巻	コインは円形である 菊人形  美を求める心	認識とレトリック 菊人形に見る日本の風流、 歴史  美を感じることの大切さ
	内田 芳明	「風景の現象学」	風景のリズム	歴史的、文化的人間の生 と自然的風土的生の総 合としてとらえる風景
	鈴木 孝夫	「ことばの人間学」	自己規準と他者規準	日本と西洋の、価値規準 の持ち方の違い
国 語 II	外山 滋比古	「省略の文学」	日本語のレトリック	「島国言語」としての日 本語の特徴
	多田 道太郎	「しぐさの日本文化」	ものまね—しぐさの日 本文化—	模倣と独創から見た日本 文化
	柳田 国男	「定本柳田国男集」 第二巻	椿は春の木	椿の林のいわれを探りな がら、人々が椿をどう感 じ、広めたかを考える
	山崎 正和	「異沌からの表現」	自然回帰のための機械	カメラによって、自然の 感動をとらえる日本人と、 写真というもののあり方
現 代 文	中村 雄二郎	「知の旅への誘い」	好奇心—知的情熱とし ての	好奇心が文化や学問の原 動力となること
	中村 光夫	中村光夫全集第十三 巻	青春について	青春論・人生論
	黒井 千次 丸山 真男 唐木 順三	任意の一点 「日本の思想」によ り一部省略 「詩と死」	ある親しい感覚 「である」ことと「す る」こと 日本人の自然観	劣等感について 日本の近代社会の特質  文学、日本語、伝統と歴 史の中の日本の自然

現 代 文	小林 秀雄	新訂小林秀雄全集第 八卷	無常ということ	「無常ということ」「平 家物語」
	徳富 蘆花	蘆花全集第三卷	自然と人生	落日に偉人の最後を見る
	幸田 露伴	露伴全集第二十九卷	ひとり言	箴言
	パスカル／前田 陽一・由木康訳	「パンセ」	パンセ	〃
	ルナール／ 岸田国士訳	「博物誌」	博物誌	「鼠」「蝸牛」「蝶」 「蟻」

	著 者	出 典	題 名	内 容
国 語 I	谷崎 潤一郎 安部 公房	「文章読本」 「砂漠の思想」	言語と文章 日常性の壁	言語の役割など 日常性の打破ということ、 論理展開（起承転結）
	深代 惇郎	「続深代惇郎の天声 人語」	命拾い	不忍の池のカモと文明開 化
	川添 登	「象徴としての建築」	道具一人と物，人と人 とをつなぐもの	道具のシステムから人間 の社会，生活を考える
	加藤 周一	加藤周一著作集第七 巻	日本文化の雑種性	英仏が純粋な文化である のに対し，日本は雑種性 が文化の根本である
国 語 II	谷川 俊太郎	「文学3 言語」	言語から文章へ	考えから文章へ，文章の リズム，語彙の質，個人 より生まれ個人を超える 文章，言語の深み
	池田 摩耶子	「日本語再発見」	母国語の能力	外国語を学んで気づく母 国語の知識や認識
	中村 光夫	中村光夫全集第十三 巻	日本人の知性	近代日本人の知性の危機 について
	加藤 秀俊	「明治メディア考」 抄録	「見物」の精神	文明開化を例とする，日 本人の五感を通じての直 接体験主義
	池上 嘉彦	「ことばの詩学」	言葉についての新しい 認識	言語論
現 代 文	内田 義彦	「学問の散策」	正確さということ	地球が円いかどうかを例 に「正確」な物事の理解 について考える
	山崎 正和	「劇的なる日本人」	劇的なる日本人	古今・世阿弥らに見られ る西洋とは異なる「劇的 な日本人のあり方
	小林 秀雄	新訂小林秀雄全集第 十二巻	平家物語	平家物語のこと

現 代 文	中村 光夫	中村光夫全集第十二 卷	「移動」の時代	主に明治文学から見た日 本近代の皮相性
	加藤 周一	「芸術論集」	日本の庭	桂離宮を主に最も日本的 →普遍的な美について語 る
	三木 清	三木清全集第一巻 (「人生論ノート」)	旅について	旅と人生
	リルケ/ 高安国世訳	「ロダン」	ロダン	「カレーの市民」を中心 にロダンの彫刻を語る
	谷崎 潤一郎	谷崎潤一郎全集第二 十巻	陰翳礼讃	日本の建築に見る陰翳
	鈴木 孝夫	「ことばと文化」	言葉の意味, 言葉の定 義	言葉の意味と定義の違い と, その内容
	樺島 忠夫	「日本語はどう変わ るか」	日本語の将来	日本語の多様な文字の種 類の歴史とそれを支えた 日本人の態度

出版社（右文書院）

	著者	出典	題名	内容
国語 I	高取 正男	日本的思考の原型	同左	「ことわざ」を軸に、近代以前の共同体を考える。近代の内部での「ことわざ」の位置づけ、日本人の原型を探る。 人間の感情と外界認識の関係。（引用多し）  現代日本文化の問題点—経済面と精神面の関係。言語と文化の国民（民族・国家）の特殊性—相対性（日本人論）。
	島崎 敏樹	心で見る世界	自然界の表情	
	夏目 漱石 西尾 幹二	現代日本の開化 新開国のすすめ	同左 日本の宿命	
	鈴木 孝夫	ことばの人間学	自己基準と他者基準	
国語 II	中村 雄二郎	考える愉しみ	コモンセンスとはなにか	中心点と視点の特質。（西欧的論理性との差・違い） 日常性に基礎をおいた日本的なるものの表現。 芸術（絵画）の時代性、表現主体と表現方法（技法）と認識の関連性。筆者の主観的直感的表現による一般化。 日本語の同一基盤に立った集団的社会性と言語の論理的表現の特質。 日本人の表現による分析。 漢語の文化性 あいまいさと将来性
	エトワード・ホール（米）	かくれた次元	日本人の空間感覚	
	加藤 周一	薬師寺雑感	同左	
	小林 秀雄	近代絵画	モネ	
	外山 滋比古	日本語の論理	点的論理	
鈴木 修次	漢語と日本人	「的」の文化		

現代文	唐木 順三	新しい幸福論のために	同左	近代の思想的哲学的意味の整理。主客関係の転換を主張。近代の科学の主観性をどうとりこむのか？（結論弱し疑問） 近代に会った日本人— 自意識
	森 鷗外 中根 千恵	妄想 タテ社会の力学	同左 類別集団における個人と集団	日本の集団の特殊性の分析→社会と個人の関係・意識
	東野 芳明	現代観象論	同左	近代芸術の作家と観客の関係を芸術作家の側の問題意識からの展開を出発点とし、論理的に対観客の意味を述べる。
	大岡 信	紀貫之	「古今集」的表現とは何か	
	安東 次男 村野 四郎	秘すれば花 現代詩読本	今日の抒情詩について	抒情詩の時代的社会的な分析。
	和辻 哲郎	風土	モンスーン	風土と国土。国民性との関係の考察・分析。
	宮本 洋一	わが思索わが風土	地方民衆文化の崩壊	自身の出発の経緯。中央と地方、近代化からの民俗学。
	小林 秀雄	無常という事・徒然草	無常という事	認識論、現在の自己を語る。
	外山 滋比古	時間の意識	同左	読書における読者にとっての時間意識の分析（事実・説明・解釈）。
	森 有正	生きることと考えること	経験と体験	筆者にとっての認識と言語の関係の説明。（語の本質）
北村 透谷	透谷全集第二卷	一夕観	「我」と「彼=天地の幽奥」。	
幸田 露伴	幸田露伴全集第二十九卷	ひとり言	箴言。	

現代文	夏目 漱石	漱石全集第十一卷	私の個人主義	古美術鑑賞の心持ち。 言葉について。 「土着文化または「万葉集」のこと」「世阿弥の「花」についてまたは「世阿弥・禅竹」のこと」「形式の発明または「波江抽斎」のこと」。 既知によって理解する読み方と未知を読む読み方。 貫之の歌を例に詩の鑑賞における言葉の重要性を語る。 「雨のなか」「友情」「幸福たるべき義務」
	小林 秀雄	新訂小林秀雄全集第九卷	真贋	
	中村 光夫	「近代の文学と文学者」	文学とは何か	
	加藤 周一	「言葉と人間」	言葉と人間	
	外山 滋比古	「日本語の感覚」	未知を読む	
	大岡 信	「日本語の世界」第十一卷 「詩の日本語」	語の読み方が語るもの 詩の「鑑賞」の重要性	
アラン 串田 孫一 中村雄二郎 訳	アラン著作集第二卷	幸福論		

	著 者	出 典	題 名	内 容
国 語 I	鶴見 俊輔	家の中の広場	考えるということ	主体的な思考、問題意識と生い立ち。 認識上の誤りの分析から、事物の多義性を言い、更に主体的な観点へと展開する。 民芸運動の出発、日常性の発見（主観的展開）（基準の主観性）。
	大森 莊蔵	流れとよどみ	真実の百面相	
	柳 宗悦	雑器の美	同左	
国 語 II	長田 弘	詩人であること	幸福という一語	言語の日常性と社会性、言語のもつ意味、働き。方言を中心に近代における自意識を相対化することにより、思考方法の問題に展開（中央と地方）（日本の標準語の欠落—特殊性） 思考のパターン化から逃れること—認識の視点の変化、公式からの脱出。他者との関係により成立する社会。個人から「日本」をどう体験したのかを問う。国家と世界（個人から連なる）。 日本語の歴史的展開とそれを規定したあり方を日本的とする。そこに積極的意義を見出す。（延伸的であり、発展的であるが、質的变化に欠けるとする。）
	木下 順二	運命のこちら側	私のふるさと論	
	坂口 安吾	ラムネ氏のこと	同左	
	武満 徹	樹の鏡，草原の鏡	暗い河の流れに	
	阪倉 篤義	日本的知性と日本語	同左	

	柳父 章	翻訳語成立事情	「社会」ということば	言語と概念の関係から近代日本についての分析を出発させる。 社会性から日本の近代の出発を見る。
現代文	夏目 漱石 寺田 寅彦	現代日本の開化 案内者	同左 同左	行動における自主性の問題を言う。 近代の資本制度による社会問題の指摘。 (右文・現代文) 筆者の思考による言語認識の展開の形をとった人間論。 日本論, 論理的基準, 価値判断の基準の日本の特質をいい, 現代, 近代の認識を述べる。結果と過程→場面の違い。 青春の意味を, 自己の問題という点より展開する。個別性と同一性の両者の関わりを言う。 個の内部と歴史の関わり。時代の意識と世代の関係。思考することのパターンの基本を言う。 体験の認識と伝達の問題同様の意識。 精神的な体験の言語化により真実と思えるものが伝達しえない。同一基盤における認識の共同性。
	有島 武郎	武者小路兄へ	同左	
	小林 秀雄 三木 清	無常ということ 人生論ノート	同左 同左	
	丸山 真男	日本の思想	同左	
	高橋 和巳	自立と挫折の青春像 我が青年論	我が青年論	
	日高 六郎	戦後思想を考える	体験を伝えるということ	
	J・Pサルトル 小林 正訳	占領下のパリ	同左	

	著者	出典	題名	内容
国語 I	井上 靖	好きな言葉	同左	体験，経験をもとにした言語解釈により，主体を明らかにする。
	辻 まこと	山の景観	同左	物理的な視界から認識的な視界へ比喩的展開。
	別役 実 名取 洋之助	自動販売機 写真の読み方	同左 記号としての写真	自動販売機—文化現象論。写真の記号性。写す側と写される側。共通理解の上に立っている記号。
	吉田 精一 亀井 節夫	小説とは何か 日本に象がいたころ	同左 同左	小説論。
国語 II	河合 雅雄	サルが目ヒトの目	「生きる」ということ	人間を動物のレヴェルから見直す。種と個の関係。社会性と精神性（人間の特質）。
	多田 道太郎	ことわざの風景	同左 （原題「かえるの行列」）	かえるを比喩にした人間論。文化起原論（社会論）人間が自由であることの意味—本質。（行為の自主性・善の選択）→他者信頼。論理，判断の出発点。
	吉野 源三郎	ヒューマニズムについて—人間への信頼	人間への信頼	旧石器後期，ヨーロッパの洞窟画の意味—見ることの主要性。表現のリアリティー（写実） （芸術とは何かが欠けている）
	井出 則雄	西洋の美術—原始と太陽	洞窟の芸術	

出版社（角川書店（精選））

	著者	出典	題名	内容
国 語 I	庄野 潤三	喜劇の作家	同左	人間の個の心のあり方から人間存在へ。人の存在のかなしさ、おかしさ。 （角川・総合にあり） 科学の基本的な理論が純粹であることは、人間と離れている。 実際の運用に関わる人間に対しては科学は無力である。 日本の町（都市）は盆地にある。一限られた空間内に感覚的に安定している。（区切られている）山を境とする。対西洋、中国の都市—城壁、のうちとそと。 科学的推論、事実の組み合わせ。
	吉田 精一	小説とは何か	同左	
	朝永 振一郎	人類と科学	同左	
	山崎 正和	日本的表現の環境	日本人の空間感覚	
	樋口 敬二	エベレストはなぜ I V 11.2メートル	同左	
国 語 II	辻 邦生	「海辺の墓地から」	幸福について	社会内部での個人のあり方。 「他人の眼」の二義。 1. 社会内での一般化するための基準。 2. 自己の意味を相対化する基準。 社会内部での個人の社会的役割。行動・基本的姿勢の分析。判断と行動の意味。 イヌと人間社会の関係を述べ、逆の（犬から出発
	大庭 みな子	「自己を対象化する 「他人の眼」」	他人の眼	
	丸山 真男	現代における態度決定	同左	
	今泉 吉晴	イヌの世界戦略	同左	

				して)文化史を描く。 (人間の行動の半面に光をあてる)
現	渡辺 一夫 山崎 正和	読書の思い出 混沌からの表現	人間と読書 情報化時代としての現代	読書の要点, 必要性 情報化の意味を分析し, その非現実化を言う(参 光村の現代文の方が難し いが良し)。
	井上 ひさし 井出 孫六	パロディ志願 峠を歩く	パロディ思案 同左	近代化の問題を秩父国民 堂の足跡を探ねながら, 道一運輸の観点から考察 する。
代	谷崎 潤一郎 川田 順造	陰翳礼讃 サバンナの博物誌	同左 手づくりの幻想	日本の陰の美。 語における表現と実態の 乖離を日本の現代の中か ら指摘した文化論(日本 の近代論)。
	夏目 漱石 堀田 善衛	現代日本の開化 日々の過ごし方 ヨーロッパさまざま	同左 不思議な旅行者	「文化」という語から日 本の現代分析—批判(日 本の一面を切りとった短 文)。
文	大塚 久雄	近代における自由と 自由主義	同左	自由(自由主義)を近代 ヨーロッパにおける思想 運動との関係から考察し, 基本に人間的なるものの 倫理を見る。

出版社（旺文社）

	著 者	出 典	題 名	内 容
国 語 I	〈再訂版〉 加藤 秀俊	機械と人間（抄）	機械と人間	人間相手から機械相手へ の変化
	多田 道太郎	隔たり	隔たり	人間関係の距離感，心理 的距離差
	中村 光夫	講演	金銭と精神	日本近代化の一側面から みた金銭

	著者	出典	題名	内容
国 語 I	〈標準国語一〉 渡辺 洋三	法とルール	日本人の契約観とルール	日本人にはなじまなかった契約（＝強弱者間の対等，権利の保証）
	〈新選国語一〉 大岡 信 野間 宏	言葉の力	言葉の力 人生と文学	言葉の力 人生の真実を感知せむる文学
	真下 信一		若さと理想	理想を有って未来に生きる
	小林 直樹	憲法を読む序（加筆）	憲法を読む	時間存在，意識や相関に於ける過去，現在，未来 憲法は生きてゆく上で大切なものである
	森本 哲郎	蛇の目の衣鉢（加筆）	自然の声と文明	自然と人間を間接的関係にしてしまう現代文明批判
	〈国語新訂版〉 中野 好夫	文学の常識	文学を生む心	真実を求める青春期の心を揺する文学
	加藤 秀俊	<書き下ろし>	現代の人間関係	記号（ここでは言葉）は人間関係を成立させるが限界が明らかであり，生身同士全人格的な触れ合いが必要（それでも不十分）
	〈国語二 新訂版〉 八杉 竜一	科学的人間の形成（加筆）	科学的思考ということ	自然科学の考え方
	大塚 久雄	意味喪失の時代に生きる	この意味喪失の時代に生きる	現象を数理的にとらえ，形式合理的な思考原理である。「今日の文化」
	国 語 II			

	亀井 勝一郎		人間形成	青春期に於る人間形成の諸徴候（考，迷，念，邂逅，言葉，死）
現 代 文	〈新選現代文改訂版〉			
	中村 雄二郎	対話と哲学的精神（加筆）	対話と論争	自己，思想を高める上での対話（含む対自分，対他人，対自然）
	伊藤 整		青春について	伊藤整の青春
	加藤 周一	創造力のゆくえ	創造力のゆくえ	創造は旧いものを受け入れて新しいものをそこに付け促すこと
	高階 秀爾	日本近代の美意識	歴史のなかの美	日本人と西欧人（仏）との美意識の相違（好新—好旧）
	山本 健吉	書き下ろし	古典について	人間形成の背景になり，価値ある書＝古典・各自古典を有て

	著 者	出 典	題 名	内 容
国 語	〈国語一，三訂版〉 大岡 信 中村 雄二郎	ことばの力 考えるたのしみ	ことばの力 人間の時間	ことばの力 時間・時間・生活のかか わり
	別役 実 福井 謙一	電信柱のある宇宙 学問の想像	座ること 科学と人間の未来	「座る」ことは新たに別 の空間（小世界）を生む 「科学」に対する「技術 の正しい進歩（善）」は 如何なるものぞ
	Ⅰ 〈新国語一・ 三訂版〉 湯川 秀樹	現代人の知恵	科学文明の中の人間	科学文明とどうかかわる か
	小林 秀樹	美を求める心（全集 九巻）	美を求める心	感ずる心の大切
国 語 Ⅱ	〈国語二，二訂版〉 上田 篤 （建築家）	ラビリンスの都市	「家」と都市	日本の農村始原を有つ 「家」が今日都市＝「家」 と化した後，文化の「破 壊へ向かう」
	星野 芳郎 （技術評通）	情報化社会をどう生 きるか	情報化社会をどう生き るか	氾濫する情報化社会の中 を生き抜くには，情報選 択「カン」の肝要
	三島 由紀夫 加藤 周一	雑種文化	小説とは何か 日本文化の雑種性	
現 代 文	〈新現代文， 二訂版〉 小林 秀雄 中村 雄二郎	考えるヒント 知の旅への誘い	考えるヒント 好奇心—知的情熱とし ての	

現 代 文	米山 俊直	日本人の仲間意識	“知り合い”と“他人”	世間（異国の慣習を含めて）のことを多く知れ
	柳田 国男		木綿以前のこと	木綿，瀬戸物，さつま芋による大変化あり，そこに損得両方あり（表現が難しいか）
	吉田 夏彦	複製の哲学	原像の追求	複製の存在あれば，なお原像を追求す（事例過多）
	青木 保	異文化遊泳 I	食べることと飲むこと	食一飲には差異あり